平成 29 年度飯豊町屋敷林リプレイス事業報告会

黒田乃生　伊藤弘　佐藤布武　（筑波大学芸術系・世界遺産専攻）

橋本剛　（筑波大学芸術系・芸術専攻）

濱定史　（山形大学建築学科）

はじめに

飯豊町では、田園散居集落景観などをはじめとした、多年にわたり受け継がれてきた美しい景観が、年間を通じ四季折々に美しい姿を見せてくれます。

しかし、ライフスタイルや生活環境の変化に伴い、景観を構成する住宅や屋敷林にも変化が見られ、これまでの田園散居集落景観が変容しつつあります。

美しい農山村空間の形成と維持には、膨大な時間と資源が必要です。今こそ、私たちの住む飯豊町の価値を再び見つめ直すことが必要となっています。

飯豊町長　後藤　幸平

調査の方針

飯豊町の田園散居集落景観は、季節や気候、人々の営みなどによって一年を通じて多様に変化し、多くの人々を魅了しています。

北西からの風雪への備えとして植えられた屋敷林は、建築物を建てる際の用材や収穫した稲束をかける稲がけとして、杉葉や小枝は炊事や風呂の燃料などに利用するなど、生活と密着した利用が行われてきました。また、この自然豊かな空間は、木登りや昆虫採集など、子どもたちの格好の遊び場でもあり、こうした自然と身近に触れ合うことができる身近な場として、自然や人との付き合い方を学び、心豊かな人間性を育んできました。

しかし、時代の変化とともに、屋敷林の役割が希薄化するとともに、景観を構成する住宅や屋敷林にも変化が見られ、これまでの田園散居集落景観は大きく変容しつつあります。

景観が変わりゆく現代において、まず、田園散居集落の現状について正しく把握する必要があります。屋敷林や民家、付属屋などの現状を把握し、その性質と役割、環境効果といった一連の分析を行うことで、保全のための指針策定に必要な基礎調査を実施しました。

筑波大学芸術系・大学院世界遺産専攻　教授
黒田　乃生

目次

１．はじめに

２．飯豊町のこれまでとこれからのまちづくり　４

３．屋敷林の現状　６

４．飯豊町の屋敷地構成の特徴　８

５．飯豊町の民家　１０

６．屋敷林と温熱環境　１２

７．おわりに　１４

飯豊町のこれまでとこれからのまちづくり

筑波大学芸術系・世界遺産専攻　教授　黒田乃生
専門分野：文化的景観

これまでの飯豊町の取り組みは？

飯豊町では昭和 49（1974）年の総合計画「手づくりのまちいいで」策定から第四次総合計画に至るまでに多くの調査研究が行われ、計画や指針が策定されてきました。大きくは住民参加のまちづくりを実施した最初の総合計画から地区別の土地利用計画の策定までの時期（1974 ～ 1994)、環境に関連した調査をふまえた指針づくりの時期（1996 ～ 2005）にわけることができます。この流れの中で飯豊町において田園散居集落景観に注目が集まったのは、平成 5（1993）年農林水産省による「第 1 回美しい日本の村景観コンテスト」での最優秀賞受賞です。それ以来田園散居集落景観は重要な環境資源、景観資源として位置付けられ、平成 7（1995）年の「第 10 回農村アメニティコンクール」でも最優秀賞を受賞しました。最初の総合計画とその後の土地利用計画は当時の最先端のまちづくりの手法であり、住民の参加による計画の策定や大規模な意識調査が実施されています。その後も環境共生という新概念を掲げた現地調査や生活実態調査が行われています。住民参加、環境共生のいずれの流れも東京工業大学青木研究室、日本大学糸長研究室の支援を得て実施されたもので、計画や指針の策定のほかに、研究成果として日本建築学会の大会で発表されたり、各研究室の修士論文、博士論文として公表されたりしています。また、一連の流れとは別に、平成１４年に町によるかやぶき民家調査が実施されており、現状と比較する際の重要なデータが残されています。

これからの飯豊町を考える

飯豊町は専門家の助言のもと住民主体のまちづくりがそれぞれの時代の最先端の切り口と手法で進められ現在に至ります。しかし、これまで屋敷林の悉皆調査はなく、分布や全体的な数は把握されていません。一方民家では 15 年前のかやぶきの調査が貴重なデータとなっており、現在までに多くが消失していると考えられるため比較検討が必要です。

民家については、大正期から多くの研究の蓄積がありますが、東北地方では仙台平野、胆沢盆地 が取り上げられることが多く「散居村」としての飯豊町が取り上げられるのは管見の限りでは平成期以降です。美しい田園散居集落景観が広がっており、その知名度も高いのに対し、十分な現状の把握が行われていないと言えます。また、屋敷林についても同様で、なぜ最近まで飯豊町が散居村、散村の事例として取り上げられることがなかったのか、景観の変化も含め今後の研究の余地があると考えられます。

表１　飯豊町散居景観に関連する計画、調査等

	総合計画	計画・指針等	報告書・その他	発行年	タイトル/できごと	著者/発行	備考
散居景観への注目			●	1973	山形県・飯豊町総合計画　中間報告・No.3	専門委員会	
			●	1973	町づくり中間報告（昭和47年度）	飯豊町120人委員会	
	●			**1974**	**手づくりのまちいいで 飯豊町総合計画　1974**	**飯豊町**	
	○			1974	手づくりのまちいいで基本構想 飯豊町基本構想	飯豊町	
	○			1974	手づくりのまちいいで　まちづくりの流れ	飯豊町	
住民参加			●	1984	飯豊町農村計画研究所完成	飯豊町	飯豊町大字高峰
	●			**1987**	**第二次飯豊町総合計画**	**飯豊町**	
			●	1991	これからの農村整備の方向と土地利用計画 第１回農村計画講座	飯豊町農村計画研究所	
		●		1991	椿の現在・未来（椿講PARTII）	椿区民会＋土地利用計画策定特別委員会	
			●	1993	第１回美しい日本の村景観コンテスト　農林水産大臣賞受賞	農林水産省	
		●		1994	いきいきなごやかまちづくり （荻生地区土地利用計画）	荻生地区土地利用計画策定委員会	
			●	1995	第10回農村アメニティコンクール最優秀賞受賞	国土庁/（財）農村開発企画委員会共催	
		●		1996	いいでみいどり・景観形成に関する基本方針策定基礎資料	（株）農村都市計画研究所	指導助言：日本大学、愛植物設計、後半に基本方針記載
		●		1996	『いいでみいどり・景観形成に関する基本方針』要約版	（株）農村都市計画研究所	
		●		1997	未来わくわく小白川（小白川土地利用計画）	小白川土地利用計画委員会	
			●	1997	平成８年度飯豊町環境調査報告書	飯豊町	
			●	1997	平成９年度飯豊町環境調査報告書	飯豊町	水環境の調査
			●	1997	平成９年度　環境評価指標調査報告書	（株）農村都市計画研究所	指導助言：日本大学、愛植物設計
			●	1997	平成９年度　環境評価指標開発基礎調査報告書	（株）農村都市計画研究所	
環境共生		●		1998	環境にやさしい暮らしのガイドブック	飯豊町	
			●	1998	平成９年度 自然共生型生活調査報告書	（株）愛植物設計	
		●		1999	飯豊町地域住宅（HOPE）計画	飯豊町住環境（HOPE）検討委員会	調査委託：地域計画研究所
		●		2000	飯豊　道ばたガーデニング講座 （飯豊町環境基本計画推進）	飯豊町住民課	協力：愛植物設計
	●			**2001**	**第三次飯豊町総合計画**	**飯豊町**	
			●	2002	飯豊町かやぶき家屋分布図	飯豊町（田中久美子）	各家の写真、聞き取り調査のデータあり
			●	2004	「東洋のアルカディア郷再生特区」認定	内閣府構造改革特区	農家民宿、農家レストラン、酒類製造等
			●	2005	平成16年度「環境と経済の好循環のまちモデル事業」報告書	飯豊町	
			●	2005	シンポジウム「散居と自然にくらす」パネリスト発言要旨 （第７回全国散居村サミットinいいで）	飯豊町主催	
				2008	ＮＰＯ法人「日本で最も美しい村」連合加盟	ＮＰＯ法人「日本で最も美しい村」連合	
	●			**2011**	**第四次飯豊町総合計画**	**飯豊町**	
			●	2016	山形県飯豊町における近世・近代建造物調査報告書（渡邊六郎兵衛家長屋門に関する調査所見）	長田城治（郡山女子大学家政学部人間生活学科）	
		●		2016	旧飯豊分校跡地利活用計画基本構想	飯豊町	
			●	2017	「全国散居村サミット2017inいいで」サミット、パネルディスカッション発言要旨	飯豊町	

屋敷林の現状

筑波大学芸術系・世界遺産専攻　准教授　伊藤弘
専門分野：観光開発

屋敷林には何が使われている？

屋敷林はスギが主に使われ、一部ヒバやマツ、クリやケヤキなども用いられていました。柵の種類は、板などを使用している木柵・トタン・ブロック・フェンス（ネットも含む）に大きく分かれます。全体ではトタンが最も多く（71 世帯）、次いで木柵（64 世帯）、ブロック（31 世帯）、フェンス（11 世帯）でした。スギを中心とした高木が列植されている屋敷林は 358 世帯中 295 世帯あり、依然として屋敷林のある敷地は多いのも特徴です。

屋敷林・スギ以外の高木・中低木・柵の組み合わせをみると（表 1）、最も多い組み合わせは屋敷林と中低木の組み合わせでした。屋敷林 - 高木 - 中低木、屋敷林 - 中低木 - 柵、屋敷林 - 柵、屋敷林のみはほぼ同数ありました（図 1）。また、屋敷林・高木・中低木・柵のいずれもない敷地も同じくらいありました。

屋敷林と高木・中低木・柵が敷地内の同じ方角に植えられている場合の位置関係をみると、屋敷林と中低木の組み合わせでは、スギ高木と中低木が列植しているものが多いです。一方、屋敷林と高木の組み合わせでは、屋敷林の外側に高木が植えられ、あたかも屋敷林を守るように高木が植えられています。また、屋敷林の端周辺にはクリなどの高木広葉樹がしばしば植えられていました。屋敷林と柵の組み合わせでは、柵が屋敷林よりも外側にあるものと、柵を挟んで屋敷林が列植されているものがありました（図 1）。屋敷林の外側に柵や高木を植えることで、防風効果をより高めていることがうかがえます。屋敷林がなく、高木があるタイプは非常に少なく、屋敷林がない敷地では、他の高木・中低木・柵も見られなくなることが考えられます。

表１　屋敷林の組み合わせ

屋敷林	高木	中低木	柵	世帯数
有り	有り	有り	有り	32
			無し	40
		無し	有り	18
			無し	36
	無し	有り	有り	41
			無し	50
		無し	有り	39
			無し	40
無し	有り	有り	有り	1
			無し	
		無し	有り	
			無し	1
	無し	有り	有り	2
			無し	5
		無し	有り	10
			無し	42

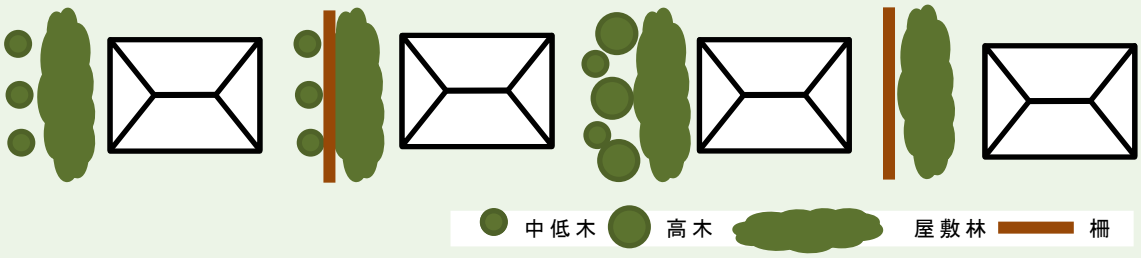

図１　屋敷林・高木・中低木・柵の配置

屋敷林の特徴は？

敷地内での屋敷林・高木・中低木・柵の配置による組み合わせから統計手法を用いてタイプ分類した結果、19 タイプに分類されました（表 2、図 3）。

最も多いタイプはタイプ 1 でした（65 世帯）。このタイプは、他の高木や中低木・柵がみられる敷地もありましたが、その数は極めて少ないです。次いで何もないタイプ 2（44 世帯）、タイプ 3（40 世帯）、タイプ 4（35 世帯）と多く、これらで全体の過半数を占めていました。

表 2　敷地内の配置による分類

（タイプ内での平均世帯数）

タイプ	屋敷				高木				中低木				柵				特徴	世帯数
	東	西	南	北	東	西	南	北	東	西	南	北	東	西	南	北		
1		0.9		0.0		0.0			0.0	0.0	0.0	0.1		0.5		0.2	屋敷林・西	65
2																	なし	44
3		0.9				0.5				0.7	0.6			0.6			屋敷林・西−中低木・西南	40
4		0.9		0.6		0.3		0.1		0.3	0.2	0.6		0.4	0.0	0.1	屋敷林・西北−中低木・西南北	35
5		0.8	0.4	0.2		0.4	0.9			0.2	0.4	0.2		0.3	0.1		屋敷林・西−高木・南	28
6		0.9	1.0	0.2		0.1	0.1			0.3	0.3	0.2		0.3		0.2	屋敷林・南西	22
7		0.8	0.3	0.1		0.2				0.3	0.2	0.1		0.8	1.0		屋敷林・西−柵・南西	18
8		0.8				1.0								0.3			屋敷林+高木・西	18
9		0.9	0.4	0.3		0.4	0.2	1.0		0.3	0.4	0.2		0.2		0.1	屋敷林・西−高木・北	16
10		0.5	0.1	0.1		0.4	0.1		1.0	0.2	0.6	0.1		0.3	0.1		中低木・東南	15
11	1.0	0.3	0.4		0.1	0.3	0.2		0.4	0.1	0.1	0.1		0.5	0.1		屋敷林・東+α	10
12	0.1	0.7		0.2		0.2			0.1	0.4	0.1	0.1	1.0	0.2	0.1	0.6	屋敷林・西−柵・東+α	9
13				0.9								0.9				0.1	屋敷林+中低木・北	8
14	0.1	0.8	0.1	0.4	1.0	0.5	0.3	0.3	0.1	0.1	0.5	0.4			0.1		屋敷林・西−高木・東−中低木	8
15		0.7		0.2				1.0									屋敷林・西−高木・北	6
16										0.8	0.7						中低木・西南	6
17															1.0		柵・南	5
18									1.0								中低木・東	3
19	1.0																屋敷林・東	1

網掛けはタイプ内での平均世帯数3分の2以上

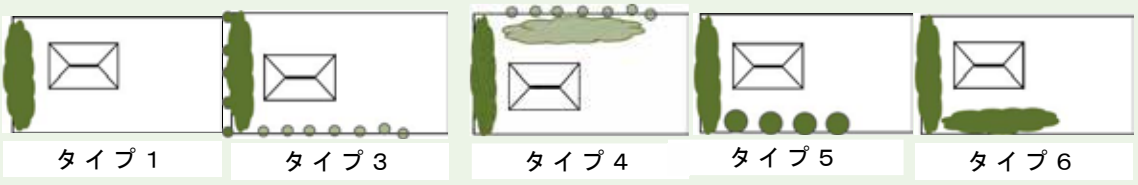

図３　敷地内の配置によるタイプ分類

地区の共通点と相違点をみたところ、複数列の屋敷林のある敷地の割合は、中地区および萩生地区で多く確認されました。また、柵の種類は中地区と萩生地区ではトタン柵が最も多いのに対し、黒沢地区と椿地区では木柵が最も多かったです。

次に、分類した屋敷林配置タイプの世帯数を地区別にみると、地区ごとにタイプがやや異なっていました。萩生地区および黒沢地区ではタイプ 1 が最も多く、中地区ではタイプ 3 が、椿地区ではタイプ 4 が最も多く確認できました。中地区と萩生地区では世帯数上位 3 番目までのタイプは同じでしたが、黒沢地区ではタイプ 6 が多く、椿地区ではタイプ 5 が多かったです。

飯豊町の屋敷地構成の特徴

筑波大学芸術系・世界遺産専攻　助教　佐藤布武
専門分野：農村計画・建築史

飯豊町の民家の特徴は？

飯豊町の母屋は長方形平面が基本で、長軸方向の東面か南面に玄関を設けていました。南北長軸東入のものが 58.7%（202 世帯）で、東西長軸南入のものよりも多く確認できました。全 344 棟のうち、歴史が古いと想定される茅葺屋根を持つものが 64 棟、それ以外のものが 280 棟確認できました。茅葺屋根を持つものの内訳は、茅葺民家が 8 軒、茅葺屋根の上に金属板を載せた民家が 52 軒（以下、「トタン被覆民家」という。）、茅葺屋根の上に瓦を載せた民家が 4 軒（以下、「瓦被覆民家」という。）でした。これら茅葺屋根を持つ民家の中には、部分的に増改築を施し一部２階建にした例が確認され、方位別に改築方向を整理すると東が 20 棟、西が 11 棟、南が 4 棟、北が 25 棟でした。母屋長軸の玄関方向と反対側に土蔵を設ける傾向があり、西・北方向のものは土蔵との接続部分を改修したもので、東方向のものは長軸方向に延長したものでした。

図１　茅葺民家

図２　トタン被覆民家

民家をまもる人々の工夫

各世帯は、茅葺民家の周りに付属屋を配置し、その周辺に屋敷林や生垣などを設けることで、冬季の厳しい季節風から民家を守っています。母屋周辺に設けられた付属屋は計 741 棟あり、土蔵 151 棟のほか、木の板でできた板倉 22 棟、在来構法の納屋 72 棟、それ以外の倉庫 496 棟が確認できました。図４に、それぞれの付属屋が母屋に対して位置する方位を示しています。土蔵は母屋西方向に位置するものが半分近く、南と西方向がそれぞれ２割程度を占めます。土蔵は味噌蔵･衣装蔵と呼ばれることもあり、生活に密接に結びついた重要なものをしまう役割があるため、特に寒冷地では母屋に接続される傾向にあります。飯豊町の場合、多くは長軸方向の玄関と反対側に接続されていました。また、壁面が多く堅牢な土蔵は、母屋西方向に配することで母屋の防風性能を高める役割も持ち、飯豊町でも母屋と接続しない土蔵は西側に多く立地しています。板

倉は南方向が最も多く、それ以外の方位には優位性は見られませんでした。板倉は「モミド」とも呼ばれており、その名の通り米を収蔵する高床の木造建造物です。主として屋敷地外から母屋に至る動線の途中の、日照の得られやすい場所が選択されるため、一般的に南方向に位置します。納屋と倉庫は同じような割合で分布しており、東方向が最も多く、南北方向が次いで多かったです。飯豊町の場合、東入りの民家に優位性があることもあり、東南方向から屋敷地内に入ることが多く、農業との関わりが強い納屋と倉庫は東側に配置されていました。

図３　付属屋（左・土蔵 / 中・板倉 / 右・納屋）

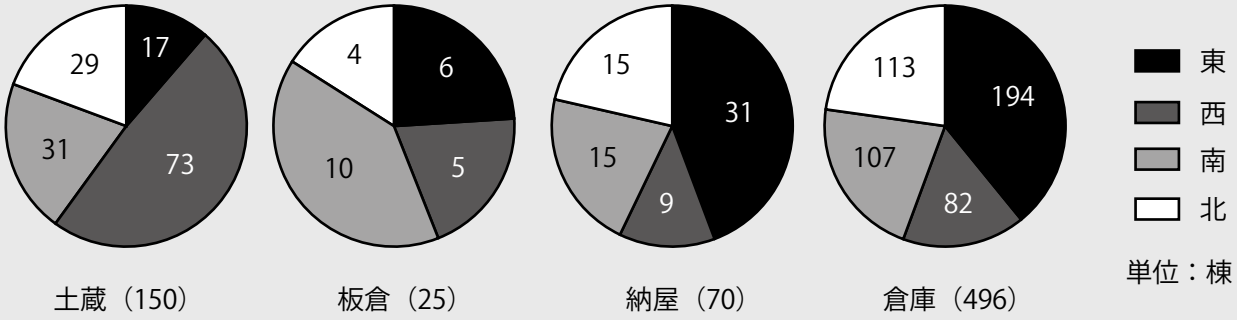

図４　付属屋の方位別立地傾向

茅葺き屋根を持つ 64 世帯の屋敷地配置を分析しました。南入の場合、民家と接続する土蔵を北方向、民家に隣接する土蔵を西方向、独立した土蔵及び板倉は南方向に配置していました。屋敷林は西・北方向に多く確認され、下部には木柵とトタンが配置されました。東入の場合、民家と接続する土蔵を西方向に配置し、独立した土蔵は東側、板倉は東か南方向に配置されていました。

表１　茅葺き屋根を持つ民家の屋敷地配置

			東	西	南	北				東	西	南	北
南入31	母屋	増築	0	0	4	0	東入33	母屋	増築	0	0	2	1
		改築	12	2	0	8			改築	3	4	2	6
	付属屋	土蔵	0	6	8	14		付属屋	土蔵	3	17	1	1
		板倉	0	1	3	1			板倉	2	0	2	0
		納屋	5	0	3	2			納屋	1	0	0	4
		倉庫	14	15	17	5			倉庫	25	2	4	8
	屋敷地境界	屋敷林	2	29	2	15		屋敷地境界	屋敷林	2	31	10	7
		木柵	0	5	1	2			木柵	0	7	2	0
		トタン	0	6	0	1			トタン	1	6	0	0
		ネット	1	1	0	2			ネット	0	1	1	1
		庭木果樹	4	1	14	3			庭木果樹	15	1	7	1

民家の特徴

山形大学工学部建築・デザイン学科　助教　濱定史
専門分野：木造建築構法

飯豊町の中門造民家

屋根をＬ字型にした「中門造」という民家形式は、日本海側の秋田や新潟、山形の特に積雪の多い地域に見られます。同じようなＬ字型の屋根の「曲屋」は牛馬を飼育するための厩を拡大させたいわば馬産地の民家形式といえます。中門造は一部に厩があるのは同じですが、突き出た中門部分の正面に入口を設けて積雪時の通路を確保する雪国の暮らしのための民家といえます。このような中門造は江戸時代の中頃から普及したと考えられていますが、戦後、家畜を飼育しなくなったことや屋根に谷が生じるため管理が難しいことなどから、中門造民家はその姿を消しつつあります。

1950 年頃の民家調査（小野芳次郎「山形県の中門造」地理学評論第 26 巻別冊 2，昭和 28 年）によると、飯豊町の中津川・豊川地区では半数以上の民家が中門造の民家であり、山形県内では最も多く分布していることが記録されています。主屋の正面に２階建ての切妻破風の屋根を突き出すことや、裏手の土蔵に接続する取次をもつ「裏中門」の形式をとることが飯豊町の中門造りの特徴であり、まだまだ多くの中門造民家をみることができます。

暮らしをささえる土蔵と板倉（モミド）

飯豊の民家の付属小屋は、農作業をおこなう納屋・味噌や家財を収納する土蔵・籾を収納する板倉（モミド）というように役割分担しており、これらの役割に合わせて屋根や壁のつくりに様々な工夫がみられます。

Ｍ邸の土蔵と板倉（モミド）の屋根は土蔵本体と隙間をつくる置屋根というつくりで、本体と屋根の間を設けることで屋根からの熱をクラの中に伝えづらくする仕組みです。

土蔵の壁は外観からは、板で覆われており一見すると、板倉のようにも見えますが、「サヤ」と呼ばれる木の外装で土蔵を覆っています。これは風雨・積雪から壁を守る仕組みです。その内側の土蔵の壁は柱をたてて貫を通し、その間に厚板を落とし込み、外側に土を塗りつけて 300mm ほどの厚さとなっており、幾重にも重ねた壁で内部の家財や味噌を守る仕組みとなっています。

一方、板倉（モミド）では内部には籾を蓄える籾入れが備え付けられ、床を上げて通気を良くしています。壁は柱に貫を通して間に薄板を二重に貼っていますが、棟束には「明治四拾弐稔拾壱月吉祥日」と書かれた棟札があり、拡大する農業生産に合わせて大きなモミドが建てられたことを表しています。

これらの土蔵や板倉（モミド）の作り方は、東日本の各地に見られますが、土蔵と籾収納に特化した大型の板倉（モミド）が同居することが飯豊町の民家建築の興味深い特徴です。

図１　Ｍ邸　中門造りの民家

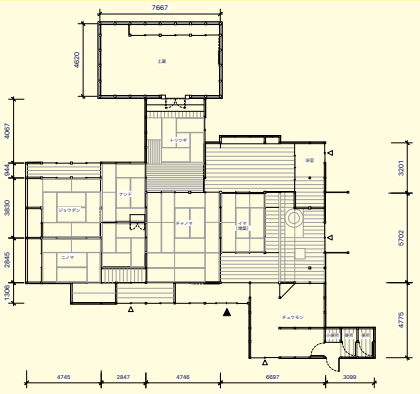

図２　Ｍ邸　主屋平面図

図３　Ｍ邸　板倉（モミド）の外観

図４　Ｍ邸　土蔵の外観

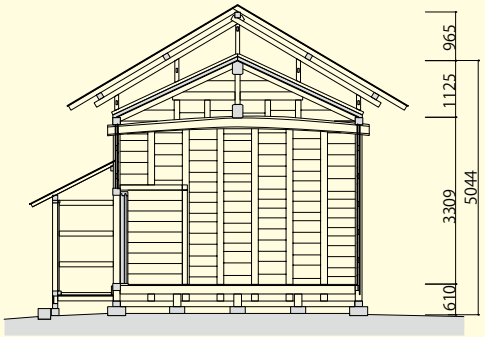

図５　Ｍ邸　板倉（モミド）断面図

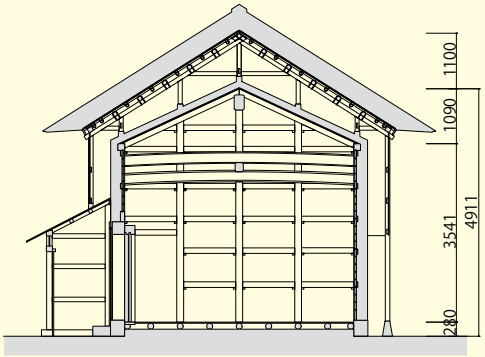

図６　Ｍ邸　土蔵　断面図

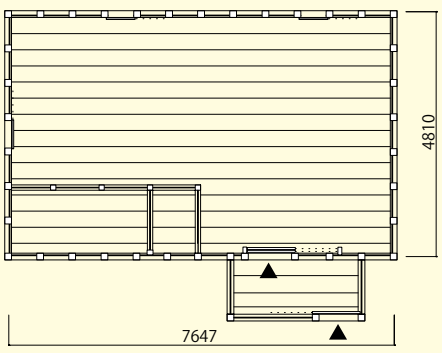

図７　Ｍ邸　板倉（モミド）平面図

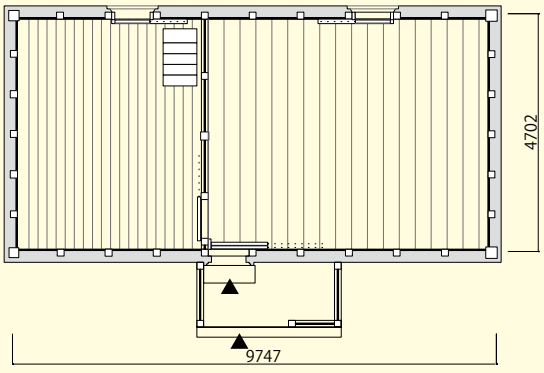

図８　Ｍ邸　土蔵　平面図

屋敷林と温熱環境

筑波大学芸術系・芸術専攻　准教授　橋本剛
専門分野：環境工学

屋敷林は冬の風から守ってくれる？

観測結果の一例を図２・図３に示しています。17 日は比較的風が強く、屋敷地外では風力２～３程度の西風が観測されました。特に観測点４では強い西寄りの風が観測されています。屋敷地内では風力０または１の観測点が多く、屋敷林のある程度の防風効果が確認できました。

防風対策の違いによる防風効果を検証するため、屋敷林のみの場合、屋敷林に古カザライが設置された場合、屋敷林に木柵が設置された場合（観測点４・６・12・15）の風速を図４に示しました。今回の観測結果では、屋敷林に木柵が設置された場所（観測点６）において、防風効果が最も明確に現れました。ほとんどの観測時間においてほぼ無風で、最も風が強かった 17 日 14 時においても、風速は 1m/s 未満でした。次いで、屋敷林にカザライが設置された場所（観測点 15）での防風効果が確認できました。一方、屋敷林のみの場所（観測点 12）では風の強かった観測時間では 2.0m/s の風速が観測されました。飯豊町の屋敷林はスギを単列で配置することが多いため、地上付近における屋敷地内の防風効果を高めるためにはカザライ等の設置が望ましいものと考えられます。

図１　観測点

図２　観測結果（2017 年 12 月 17 日６時）

図３　観測結果（2017 年 12 月 17 日 14 時）

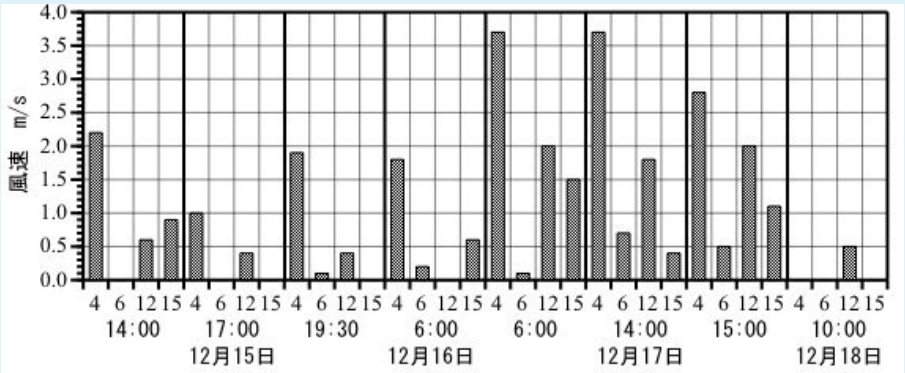

図４　観測点４・６・12・15 における風速の観測結果

建物の中は何℃なんだろう？

測定結果の一例を図５から図 10 に示します。測定期間における外気環境は、気温が約 - ５～５℃で推移し、相対湿度はほぼ 100%となった時間帯が多く確認されました。母屋における測定結果（図５および図６）をみると、居間では気温および相対湿度が急激に変動しています。これは暖房機器の使用や戸の開閉によるものです。暖房機器使用時における気温は約 15 ～ 30℃で寒冷環境ではありませんが、相対湿度が約 30 ～ 40%とやや乾燥しています。また、暖房機器を使用していない二の間の気温は約０～５℃とかなり寒冷な環境になっています。住宅内での気温差が大きく、ヒートショック対策が必要と考えられます。付属屋における測定結果（図７から図 10）をみると、気温、相対湿度ともに土蔵が最も安定した（変化の少ない）室内環境を形成しています。これは、土蔵の蓄熱性と断熱性が現れているものと考えられます。板倉の測定結果をみると、モミグラの方が室中央よりも安定した（変化の少ない）相対湿度環境を形成していました。特に、16 日の日中における相対湿度の上昇を緩和している様子が確認できます。厚板に囲まれたモミグラでは無垢材による調湿効果がより明確に現れているものと考えられます。

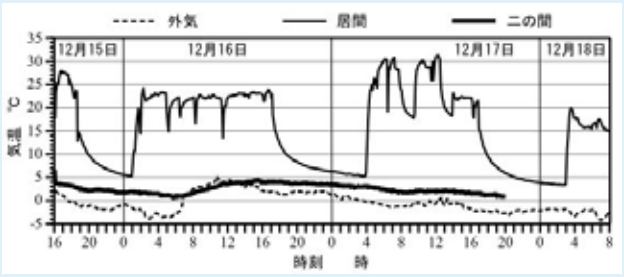

図５　気温の測定結果（母屋）

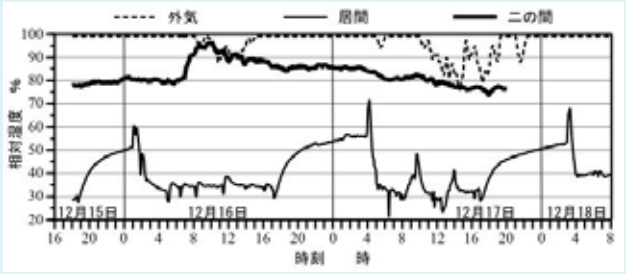

図６　相対湿度の測定結果（母屋）

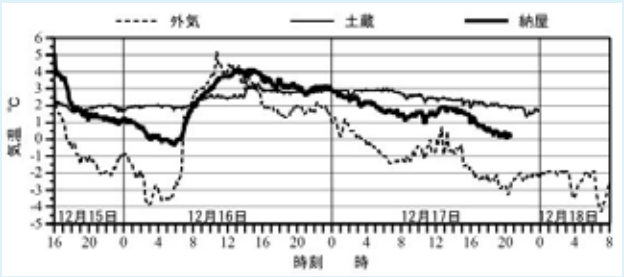

図７　気温の測定結果（土蔵・納屋）

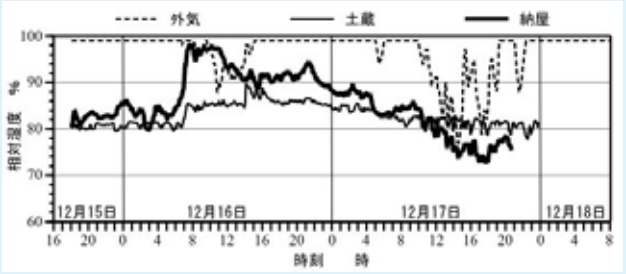

図８　相対湿度の測定結果（土蔵・納屋）

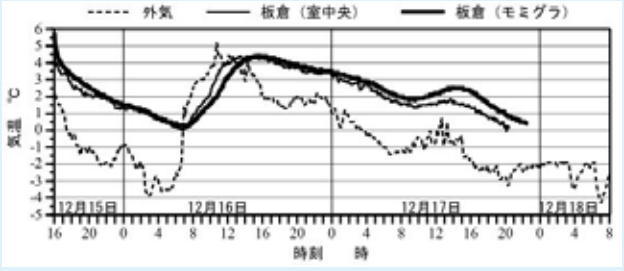

図９　気温の測定結果（板倉）

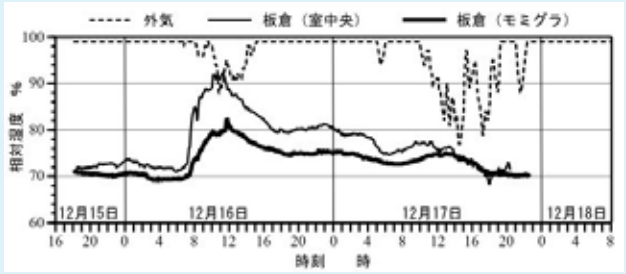

図 10　相対湿度の測定結果（板倉）

おわりに

私たちがはじめて飯豊町で目にしたのは、田園に水が張られた美しい水鏡の農村風景でした。悉皆調査を実施した１０月は黄金色に輝く稲穂に心奪われ、環境調査を実施した 12 月の真っ白い風景に出会い屋敷林の意義を痛感しました。連綿と続く住文化によって生み出された田園散居集落景観は、毎回新しい発見を与えてくれます。その美しさの要因を解明すべく、資料収集・現地調査・分析を重ねることで、飯豊町のみなさんが築いたこの美しい景観の価値が徐々に明らかになってきました。

本事業の実施に際しては多くの方にご協力いただきました。お話を聞かせていただいた飯豊町民のみなさま、悉皆調査の対象地域の住民のみなさまの協力なしでは、事業の遂行は困難でした。改めて感謝の意を記させていただきます。

１年という短い期間の本事業で明らかにできたのは、田園散居集落景観の魅力のごく一部です。一方で、この景観の価値や重要性には口を挟む余地がありません。屋敷林や茅葺民家、カザライといった地域の特徴的な景観要素を如何にして守っていくのか、それは飯豊町の今後を占う大きな課題だと思います。我々研究チームも、今後とも調査を継続し、景観を守っていく手助けをできればと考えています。

－調査担当一覧－

予備調査（2017.5.26-5.28）　黒田乃生 / 佐藤布武

悉皆調査（2017.9.27-10.1）　黒田乃生 / 伊藤弘 / 佐藤布武 / 森田なつみ / 王詣斐 / 申善姫 / 橋本剛 / 濱定史

環境調査（2017.12.15-18）　橋本剛 / 佐藤布武 / 今和俊 / 栗原広佑

民家調査（2017.12.16-17）　濱定史 / 佐藤布武 / 栗原広佑 / 今和俊 / 橋本剛

民家実測図面作成　濱定史 / 佐藤布武 / 栗原広佑

資料編作成補助　オウイチ / ハンレイエイ

－

事務局　｜飯豊町総務企画課総合政策室　後藤洋 / 鈴木祐司 / 井上友和 / 横澤剛

調査支援｜飯豊町教育委員会　髙橋拓

－

編集　｜佐藤布武